

御手紙を度々下さいまして有難うございました。相変わらず皆々様もお健やかに御辛抱なさいます由何より結構な事と存じます。私も恙なく暮らしていますからご安心下さい。八月七日に上京してから一心不乱に勉強する積りでいましたが、十三日に御手紙が参り、幾度も読み下しく考えれば考える程、私の信仰は信じたと言うのではなく、書物を知っていたのであったのに驚かずにいられたのです。直に京都に行つて（当時嵐山に下宿）お寺に参つて聞きましたけれどもどうしても安心できません。嬉しうもければ有難くもない。不安の念が胸一杯に成つて心配せずにはいられなくなりました。十四日には同封の御手紙を無漏田さんに持つて行き、御邪魔に成るとは知りつつも長時間聞かすにはいられず、聞いて理屈がよく判つていながらも胸の不安は解けもせず、聞けば聞く程妄念疑雲の深い私であると言う事を考えずにはいられなくなりました。私は永年宗学を学ばして戴きながら、人様から尋ねられた時には、六字の独働きで往生は一定と言いながら、何故傍道に踏み迷うてう様に成つたのだらうかと苦しい胸を抱いて泣きました。毎日く心配して食物も進まない程気に掛りましたが、何故心配せずにはおれなかつたのか、私自身にも判らなかつたのです。こんな苦しい思いをして氣を揉んでも仕方が無いから愉快に楽しく呑気に成ろうとすれば益々息づまるな重苦しさで寝ても寝られず起きても起きられず、死んだ先の問題を考える暇もなく、安心とか信心とか抽象的な言葉を弄ぶ予猶もなく、百味の飯食や応報の妙服など夢見る思いもなく、唯々切迫つた今の問題、他所の家が焼けているのではなく、安心し切つていた自分の魂から燃え上がった業火は、何物を持つて来ても防ぎ止める事は出来ませんでした。初めは、疑いさえ無くば八万四千の煩惱は見貫いた上の本願じゃと片付けていましたが、

千里の堤が蟻の穴から崩れる様に、疑いさえしなければよいと言う疑いが心の中で火蓋を切った時には、邪魔に成らないと思つた八万四千の業煩惱が唸りを挙げて邪魔に成るのでした。お話を聞いてもお聖教を拜誦さして戴いても馬耳東風、蛙の面に水で、靴を隔てて搔いている様で苦しい胸には響きません。仕方が無いから十七日には印度、志那から日本へと三国伝来のお釈迦様が嵐山にましますのを幸いにお参りして出離の要路を伺いましたけれども、散乱する心より外に出ませんでした。毎日く悩み抜いて十九日の夜はお仏殿を机の上に安置し、総てのお聖教を前に置いて繙いてみますけれども何ともありませんでした。「歎異鈔の講和」を読んでも「凡夫そのまま」を読んでも 焼け石に水を掛ける様なものでさっぱり受け付けてくれませんでした。電灯も消してしまつて、今晩は悶死しても苦悩の心が晴れる迄はやめないと進みました。判らんく唯が判らん。其のいよが判らん。親様は唯と言いなながら 何故こんなに私を苦しめるのでございますか。現在法龍はしい張り裂けるな渦巻く心で泣いているのに何故救うて下さらないのですかと 遂には御仏を怨み呪いました。その時の心の中の惱乱は一通りで無いにも関わらず 底の心は平気で「てれつ」としているのに驚きました。嗚呼どうしよう二 この心が「はい」と返事をしないから苦しいのだ。何故周章ててくれないか。何故驚いてくれないか。鞭打てば打つ程「きよろん」としているので泣きました。その時無常の虎の絵を思い出し、尊い妙法を耳にしながら、姿は僧侶に成りながら、業流転を続けて来た此の不実の魂が言う事聞いてくれない為に再び迷わねばならんがどうしよう、今命が絶たれたらどうしようと思つ時、天地が覆つた様な、無間のどん底へ投込まれた様な、(実地通らねば判らない)ぎりぎり舞いして「わー」と泣き伏した儘二 唯ぞ二 の勅命！ 声なき声、唯と言うのは此の儘か！、き崩れた儘が唯であったのか。自分ではどうにもこうにも成れないと投げた儘が 本願の儘にれたとは不思議じゃなあ。親様すみません赦して下さい。罪の有りたけ、障りの有りたけ、煩惱具足の有りたけで本願の白道の上を歩いていたのでありましたか。嗚呼何たる広大な慈悲かと踊り上がって泣きました。お母さん 私は今の今迄御仏様を死物の様に思い、遠い処に待っていて下さる様に思っていました、現に今私の煮え返

る心の中に生きていて下さると言う事は知りませんでした。本願の眞実を見ようとせば 毎日毎時猛り狂う私の心を見れば一番よく判るのでした。底の知れない不実<sup>ふじつ</sup>に泣けば泣く程 本願名号の力強さが判るのでした。清いに成つて安心してと思ふのが 皆自力であつて 安心し切らない心が救われた時に大安心するのでありました。私の一念一利那<sup>いちねんいつせつな</sup>に起る妄念も悉く南無阿弥陀仏と共に動いてるのでございます。欲が起ります、よく承知の上じゃ、腹が立ちます、愚痴が零れます、それが本願に契うているのであるぞ、とるのだから逃げ場が有りません。私のこのまんま罪業の持合せのなりを親に任すのであります。墮ちる世話もいらぬが上がる世話もいりません。善も欲しからず悪も恐れなしとは如何した威神力でございませう。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 大悲の御親の御催しにより泉が溢れる様に流れ出ます。念仏するなど言われても称えずにはいられません。

無慚無愧のこの身にて まことの心はなけれども

弥陀の廻向のみ名なれば 功德は十方に満ち給う

この不思議な親心を知らして下さつたのは 勿論阿弥陀如来様の御念力ではございますけれども、この御本願を聞かせる様に導いて下さつたのは御両親の御恵みでございませう。なにか御礼を言つてよいやら、ただ不思議くと喜んでいきます。

親子の間には訳も理屈も無い、只苦を苦と知らない私が可愛いばかりであつたのでした。ああ済みませなんだく謝り果ててはお念仏するだけであります。今迄は他人仏の様に思つて私の心を繕うていましたが 親の本願の邪魔をしていました。阿弥陀様は永劫の手柄を私にさしてくれよとるのに 今迄でいたのでございました。今日という今日は付き纏われて仕方が無いから、念仏は極楽にるにてやはんべるらん、又地獄に墮つる業にてやはんべるやん、どちらがどうか知り切らないけれども身も心も差し上げました。助かつたのやら墮ちたのやら、取つたのやら取られたのやら、称えるのやら称えさされるの

やら、唯々南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏の声ばかりでございます。

十三日から十九日まで苦しみ抜いて、藻掻き抜いて、どうにもこうにも持ちもげもならず、この魂を凝視めてき崩れたなりが、誓願一仏乗の正客であったとは、道理理屈を超越して不思議くの他はありません。今からお釈迦様にお礼にります。往来八千遍の御苦勞は私一人に今日の歡喜を与える為でございましたか。本願寺の親様にも御真影にも学校の講堂のみ仏様にも、私が生死流轉のその間一度はくの念力を注いで、漸く本国帰る身にさして下さった御礼に参ります。

嗚呼重荷は下りて今日の歡び、法龍の一切の無明の闇は晴れ、法龍一切の志願は満足され十方法界を貫つた廣大難思の歡びがあるのに、私一人を生かす為に無量永劫骨身を碎き、十劫已來血汐を流して立ち続け泣き続けられた親様はどんなにお喜びでございませうか。私を聖人様をお慕い申す真の仏弟子に成れよと導いて下さったお母さんが、學問や智慧で得られない他力不思議の信仰に生きたと聞かれたら、どんなにお慶びに成るでしょうか。嗚呼お母様は善知識、を生かす為に諸有苦患を身に受けて、私に先立つて泣き、私に後れて喜ぶ法藏菩薩の御化身でございませう。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏、身も心も南無阿弥陀仏、行住坐臥が南無阿弥陀仏、死んだ先の往生も嬉しいが、現在から光明の広海に遊ばして戴いている事が猶嬉しゅうございます。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も 骨を碎きても謝すべし

お母様！ この信念を獲さして貰った上からは、骨は碎けても喉は破れても一切の衆生を生かさずにはいられません。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。合掌。